No. 24

(1)

映画が好き

仙台シネマ倶楽部ニュース

1988・4・16

発行：仙台シネマ倶楽部
仙台市五橋1－5－15
平和友好会館3階
022－222－9695

4月例会 フロント・ページ

4月16日（土）

〈スタッフ〉
原作（戯曲）
ベン・ヘクト
チャールズ・マッカーサー
脚色 ビリー・ワイルダー
I・A・L・ダイアモンド
撮影 ジョーダン・S・
クローネンウエス
音楽 ビリー・メイ
監督 ビリー・ワイルダー
〈キャスト〉
ヒルディ ジャック・レモン
バーンズ ウオルター・マッソー
ベギー スーザン・サランドン
（一九七四年アメリカ映画
一時間四五分）
キネ旬ベストテン第九位

戦災復興記念館4F研修室 2:00 4:30 7:00

１０月例会『去年マリエンバートで』（予定）

L' Annee Derniere a Marienbad

１９６１年 フランス
脚本 アラン・ロブ＝グリエ
監督 アラン・レネ
出演 デルフィーヌ・セーリグ

「私はあなたと去年マリエンバードで愛しあった」ひとつのフレーズをきっかけにある女の自己が崩壊してゆく。バロック調の庭園を舞台に演じられる存在論のドラマ。神話的なまでに名声の高い映画が今幕を開く…。

今後のライナップ

5／15 『死刑執行人もまた死す』
監督 フリッツ・ラング

5／28 『カッコーの巣の上で』
監督 ミロス・フォアマン

6／18 『太陽を盗んだ男』
監督 長谷川和彦

7／16 『真昼の決闘』
監督 フレッド・ジンネマン

8／20 『妖怪百物語』
監督 安田公義

9月例会は検討中
P．6にアンケート結果掲載

会員大募集中！

入会金￥300
半年会費￥2000

映画が好き

『フロント・ページ』

《解説》『失われた週末』『サンセット大通り』『アパートの鍵貸します』『昼下りの情事』など、アメリカ映画史上燦然と輝く傑作を生み出した巨匠ビリー・ワイルダー。この映画は彼の名人芸が全編に冴えわたる傑作コメディ。「フロントページ」とは新聞の一面の事、転じてトップ記事とか特ダネの意味も。つまりこれは特ダネを求めて奮闘を繰り広げる新聞記者達を題材としている。ジャック・レモン、ウオルター・マッソー、スーザン・サランドンなど、隅々までアクの強い役者を揃えているのも楽しみ。

《ストーリー》時は一九二〇年代後半。ラジオもテレビもさほど発達していない、新聞がマスコミの花形だった頃。「シカゴ・エグザミナー紙」の裁判所詰め記者ヒルディは、ブン屋稼業の足を洗い恋人ベギーの父親が経営する広告会社の重役に納まろうとしていた。それを知った編集長はカンカンになって、警官殺しの犯人の絞首刑を特ダネにしろと厳命する。

それを無視して記者クラブで一杯ひっかけているヒルディ。そこへ脱走した死刑囚が逃げ込んできて…。

ビリー・ワイルダー

私はビリー・ワイルダーの古い作品は良く知りませんが、マルト・ケラーの出た『悲愁』が大好きでした。その語り口の旨さ、そして構成力には脱帽ものです。果たして『フロント・ページ』ではどんなものでしょう。

3月例会『恐怖の報酬』は、会員にどのような「報酬」を与え給うたか？

◆イブ・モンタンをみたのは今回がはじめてだったのですが、非常にしなやかな感じの人で感心しました。

∴新しい出会いが、また映画を好きにさせてくれるかもしれませんね。

◆ちょっと字幕が見づらかった。でもいきなり終ってしまった感じ。

∴字幕が見づらかったですが、良い映画はそれなりに感動を与えてくれますね。

◆中頃にまた眠ってしまいました。最近はどうも1時間が限度みたいになってきた様です。映画はやっぱり体力ですね。

∴元巨人の江川氏みたいですが、前半と後半を分けて二度見てはどうですか。

◆今日の映画は前に観たが、内容には文句のつけようがないほど素晴らしい作品だ。

会場の映写にはかなり難があった。それに会場の変更について全然連絡がなかったことは不満だ。知らなかったので戦災復興記念館に行ってしまい、大急ぎでこちらにまわってきた。連絡をもっと密にしてもらいたい。

∴会場変更については申し訳ございませんでした。ニュース発送の時に変更通知を同封したのですが、行き違いがあったようです。会員番号・名前をお知らせください。

◆何回か観ているが、いつでも橋のところの切返しがはらはらさせられる。また、行きの緊張と帰りの解放感で結末がどんでん返しになるのも面白かった。イスが長時間座っていると疲れるので、こういうときはたまに座敷でも良いと思う。

∴座敷でリラックスして映画を観るのも良いかもしれませんね。

◆字幕スーパーがあまりよく観えなかったのが残念だったけれど、とても感動した。久し振りにいい映画と出会ってよかったです。「あ～、怖かった」の一言。

∴字幕の読み辛いのは古い洋画の宿命みたいですが、感動できたのは作品の良さですね。

またまたお詫び

最近謝ってばかりの様な気もしますが…。今回は事前になって会場が変更になり、も～てんやわんや。当日も人手が足りなくて会員でない人までかりだしました。「二度とやりたくない」とは当日の会場責任者の弁。会員の方々には本当に御迷惑お掛けしました。そして当日手伝ってくれた人、君たちのおかげで乗り切れたのだ、どうもありがとう。特にむちうちをおして来てくれたK君には感謝。早く直してね！

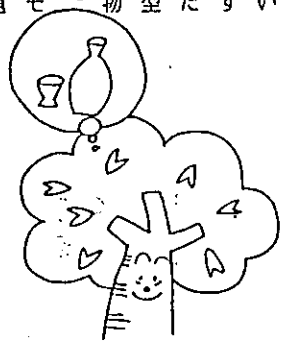
『映画評論家』

No.145 新田 邦彦

キネマ旬報のベストテンをみると、作り手が様々であるように、評論家と呼ばれる人を含め、受け手も様々であることに改めて気付く。

映画には、どんな作品にも観た時の思い出や、自分の体験と重なる部分があったり、それぞれの人が好きな作品というのがあるはずだ。しかしそれは、映画のよしあしとは別であり、評論家はそのよしあしを語らねばならないはずである。かと言って評論家のベストテンが皆同じであるべきだと思っているのではないそれぞれに、ものさしの違いもあるだろうし、作家に対する思い入れもあるだろう。だが、世の中には、作家偏愛型の評論家や、設定や登場人物に左右される評論家が多い。特に昨年の場合、「グッドモーニングバビロン」や「永遠の1/2」、「映画女優」等が評価されているのに対し、「私をスキーに連れてって」が充分な評価を得られないなど、問題点が多かった。

そもそも評論家の仕事とは映画を紹介することであり、自分の思い入れを語ることでも、作家の未熟や不都合をけなすことでもない。観客は宣伝だけに頼れないのだから、その点での評論家としての、ポジションを改めて考え直すべきではないのだろうか。



映画と私

高木 久美枝

「映画と私」という題で何か書いてと頼まれたものの、いつもボーッとして映画を観ている私には何を書いたら良いものかと悩んでしまう。

初めて映画館に入ったのは中学生ぐらいだっただろうか、従姉に連れられて『クリスマスキャロル』か『若草物語』かどちらか忘れてしまったが、それほどの感動もなく観た。覚えているのは『若草物語』に出てくる四姉妹はみんな美人だなあと思ったくらいだ。それからしばらく映画は観たことがなかった。

何年か後にテレビで『椿姫』を観たときは、ショックを受けた。後頭部から背中にかけてツーンとして魂が肉体を離れて飛び回っているようだった。「世の中にこれほど完全な理想的な美があるだろうか」と・今観ると完璧とは思えないが、そのときはガルボの美しさに参ってしまった。それから数年間は、目を閉じる度にガルボの顔がまぶたに浮かんでくるほどだった。

もう一人私を映画に引き込んだ女優がいる。ガルボの『椿姫』とほぼ同じ位の頃テレビで『間諜X27』が放映された。デートリッヒの同一人物とは思えないほどの変身ぶりと、銃殺される前にストッキングを直して身だしなみを整え、目隠しを断わって立つシーンが印象に残っている。その頃は「百万ドルの足」といわれていることを知らなかったので、ただ妖艶な美しさに心を奪われていた。『嘆きの天使』『モロッコ』でも娼婦の役が多いがどれもいい女だなと思うし、『モロッコ』での男装してタバコをくわえるしぐさは最高に粋だと思う。ガルボもデートリッヒも妖しい美しさと低い声がセクシーで、光と陰が作り出す陰影が神秘的な雰囲気の忘れられない銀幕のスターだ。

およそ非現実的な虚構の世界の中にしばし身を置く。現実からの逃避ともみえるが、映画を観ることによって沈んでいた気持ちや苛立っていた状態から開放されて、新たな生きるエネルギーとなればいいのではと思っている。

最近、美しく悲しいメロドラマでは物足りなさを感じたり、以前は涙を流しながら何度も観た映画が今では醒めた目で観てあまり感動しなくなってしまうと、少し大人になったのかと思う反面、無防備に感動できなくなってしまった自分が無性に寂しくなってしまう。どの監督の作品だとかどんな俳優が出ているとか何も知らなくても、ただ映画を観てこれからも感動したいと思う。

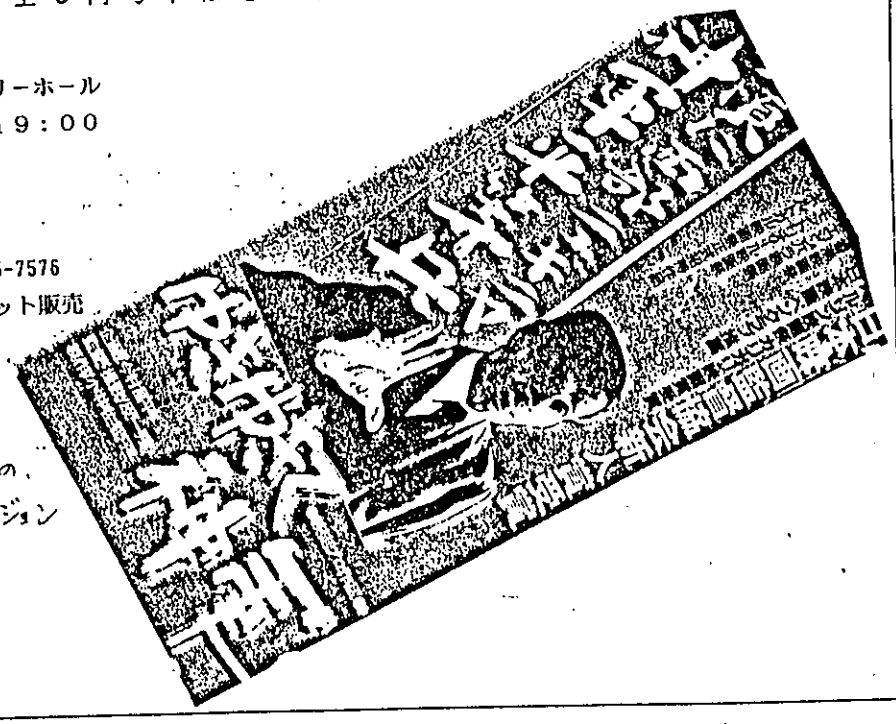
『ゆきゆきて、神軍』（監督 原一男）

昨年の超話題ドキュメンタリーがいよいよ仙台でも上映される。劇映画の陰に隠れながらも着実に成長した日本のドキュメンタリーというジャンル。今最も熱い映画の状況を体現していると言っても過言ではあるまい。これは是が非でも駆け付けねば…。そしてこれを機に小川伸介の『千年刻みの日時計』など様々な作品が上映されることを願っている。ここではいちはやく東京渋谷のユーロスペースで観てきた会員の海老沢徹氏のレポートを送る。

この作品について文を書こうと決心したのは実は観るひと月も前でした。半年近くも前から東京の友人から電話でかかってくる奥崎（映画の主役の奥崎謙三の事）ネタに悩まされてきた私は、半ば夢遊病者のようにユーロスペースの廊下に並んでいたのです。

映画が始まるや否や、奥崎の驚異的なパワーにぶちのめされる一時間半が展開し始めました。確かにスゴイーはっきりいってあの強引さには嫌悪感を覚える人もいるでしょう。一緒に観た友人は吐き気を感じたといっております。しかし私が思うに、奥崎の見せる行動力は私達全ての心奥にある凶暴なまでの正義感と同じ性格のものではないでしょうか。よく考えてみると、あの奥崎の怒りは私達全てが日頃考えている「臭いものにはフタをしろ」的な事なかれ主義に対して向けられたものであるのです。この映画は戦争中の考えるだけで鳥肌の立ちそうな事件を糾弾するのが本筋ですが、それだけに留まるものではないでしょう。現在私達の周囲を見回すとあの事件の起きた背景ほどの極限状況はないのですが、逆に今の私達にどれだけの自由があるのでしょうか。「私にだって言いたいことは山ほどあるんだ！」という気持ちは誰でもあるはずです。そんな激しいムキ出しの感情がこの映画にはある。一方逆に口をつぐむ人々もこの作品には溢れている。彼らも同じ様に言いたいことがある。しかし口に出せないのは何故なのか。それは観る側で判断しなさいとこの映画では言っている。はっきりいって私には真相を聞きたいという気も起こらなかった。彼らに暴力で喋られたら絶対に解決はしない。この映画では常に奥崎の行動に醒めた視線で応えているが、そうして観るものに敢えて当事者的な感覚を持たせまいとしたのではないか。こんな映画を観る私達、特に戦後世代には改めて重い「戦後」という十字架があるんだなあと深く考えさせられた。何か映画と同様にメチャクチャになってしまった。ともかく仙台でも上映されるそうなので、一食抜いてでも観てください。

《上映スケジュール》
4／20，21，22
エルパーク仙台ギャラリーホール
時間　14：00　19：00
前売￥1200
当日一般￥1500
学生￥1300
主催　デユエット　265-7576
シネマ倶楽部でもチケット販売



これが
「ゆきゆきて、神軍」の、
ユーロスペース・バージョン
のチケットだ！

フリッツ・ラングの よ・こ・が・お

『ゆきゆきて、神軍』もよいけれど…
『死刑執行人もまた死す』も忘れないでね！

フリッツ・ラングというと色塗り、音楽つきで再公開された「メトロポリス」を想い起こす人も多いだろう。しかし、それだけでもってこの監督を評価するとしたら、ちょっと困る。なぜなら、一つにはあの映画は、音楽の強引なリズムによってサイレントの緊張感を奪われ、一面の色によってモノクロの豊かな質感を奪われていたからだ。（それでも素晴らしくダイナミックな画面や壮大なストーリーはたのしみだが）

もう一つには、ラングにはあの頃とは評価を異にするもう一つの時代があるからだ。何を隠そう、「死刑執行人もまた死す」こそは、その代表作であり、昨年初めて日本にて公開されたという幻の最高傑作なのである。

ナチスの検閲（「怪人マブゼ博士」のエンディングを改めろといってきた）に対してスタコラとドイツを脱出し、アメリカはハリウッドで製作した、これはラングの偉大なアカンベエだ。アカンベエだからあくまで面白く観客の目をとらえて離さない。アカンベエだから気骨はたっぷり、観終わった観客はスクリーンに拍手を送るだろう。

人は、ハリウッドに行った監督というと一商業主義に屈した」などと評しがちだが、ラング自身は、この時期の作品が気に入りだという。商業主義に妨害されて、いい映画が出来ませんでした、などと弱音を吐くオッサン（失礼）ではないのだ、この人は。

皆さんもきっと、この映画を観て、これまで埋もれていた映画界の一つの星を発見するだろう。ルイス・ブニュエルらを生んだといわれる星である。

＃ドイツ表現主義時代
「死滅の谷」 ´21
「ドクトル・マブゼ」 ´22
「ニーベルンゲン／二部作」 ´23～24
「メトロポリス」 ´26
「M」 ´31
「怪人マブゼ博士」 ´32～33
＃アメリカ・ハリウッド時代
「暗黒街の弾痕」 ´37
「西部魂」 ´41
「外套と短剣」 ´46
「無頼の谷」 ´51
「怪人マブゼ博士」 ´60

ビデオ産業と劇場映画

白鳥伸二

前号の『編集後記』には大いに考えさせられた。なるほどナ、と思った。

レンタルビデオの普及という新しい動きを敵視するのではなく、逆に活用してこそ映画産業再興へのきっかけがある、という論旨であった。全く同感である。

ビデオには仰せのように、容易な作品の選択と時間や場所の融通性という、忙しい現代人にフィットする多くの要素が歴然としてある。

じゃあ、映画館の長所は何か？わざわざ映画大好き人間の皆さんを前に、敢えて記すまでもなかろう。沢山ある。一杯ある。ここではその中の一つだけを書かさせて頂く。

――わたしたちがデートする場合、食事やドライブ、スポーツ…と色いろあるが、どっこい、映画館というのも立派にある。デートし、レンタル屋から借りてきて部屋で二人して観てる、っていう光景はサマにならない。「〇時に〇〇劇場近くの〇〇っていう喫茶店で待ってるワ」と言われてこそ、男心は揺れ動き、町場での逢瀬はビッタシ来るというものだ。そして、この何気ない一言には多くの伏線というか下調べがされているのが普通かもしれない。①どの劇場で、どんな作品が上映されているか（二人が観たいのは何か？）②何時に会うか（彼の退社は何時だっけ？）③（観る前に少しお話がしたいが）あの映画館の近くにシックな茶店はなかったっけ？④映画が跳ねたらどこで食事をしよう…こちらからすれ

ば変哲もない誘いかもしれないが、つぶさに見ると色んな段取りが事前になされており、こうであってこそ楽しいというものだ。利益さイコール快楽とは限らない——いみじくも前号『青葉繁れる』アンケート欄の、テレビやビデオでは満足できないものがあるから現在でも劇場映画が成り立っているとの御意見、もっともだと思う。そしてそれは作品の選択だけに限ることではない。映画そのもの以外における有用性やら、味、あるいは副産物といえるものが、かなり隠れているような気がしてならない。千数百円を捻出して、定まった時刻に暗がりへ入っていく…。活弁時代から為されているこのパターンはやはり自然であり、それなりの意味あいも含まれているように思う。

レンタルビデオが波及しているから、ますます劇場映画は押される現実は確かにあろう。しかし（劇場側から見ての）禍いを転じて福と為す、ということは世の中に良くあることだし、それこそが仕事人の知恵というものでもあろう。

結論、そして提言。ビデオの浸透は映画界活性化の糸口となるはずである。現実を是認して、現状を劇場側にうまく利することができれば、銀幕華やかしき時代の到来も夢ではない。で、要はその方法と手段ということになるのだが…。

総会のお知らせ

仙台シネマ倶楽部は、観たい映画を自分たちの手で上映しようという人達に支えられ、自主上映を始めてもう二年になりました。

今回は、運営上の諸問題を話合い、目前に迫った5月の特別例会を成功させてシネマ倶楽部の活動をのより発展させるため、会員のみなさんから忌憚のない意見を出して戴きたいと思います。

総会は下記の要旨にて行いますので、サークルの人や友達を誘いあって是非ご参加ください。

記

日時　4月6日（水）
午後6時30分～8時30分

場所　中央公民館
パルシティ5F　第1セミナー室（A）
仙台駅東口、徒歩5分

※　議案書は当日、会場にてお配り致します。

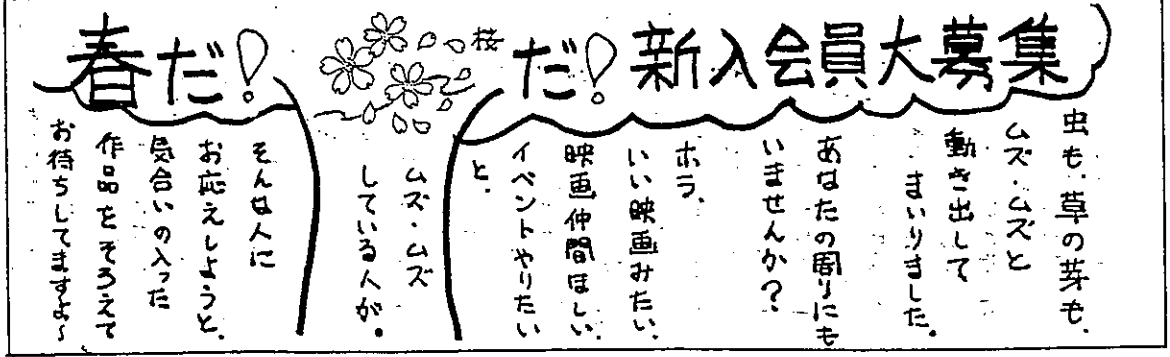
9月例会作品アンケート（今回はほんの一部。続きは次号で。）

「やさしい女」'69 仏　89分
監　ロベール・ブレッソン
★ドミニク・サンダがみたいので……。美人大好き。

「真夜中のカーボーイ」
'69 米113 分
監　ジェローム・ヘルマン
★たまには、こういうものも良いのでは……？。

「白樺の林」
'70 ポーランド　99分
監　アンジェイ・ワイダ
★ワイダが見たいと思って……。「地下水道」と、どっちが良いかなあと思ったのですが。

「秋のソナタ」
'78 スウェーデン　92分
監　イングマール・ベイルマン

「ジョニーは戦場へ行った」
'71 米　112 分
監　ルース・キャンベル
★今、見たいものというと、こんなところかな……。
私は、「真夜中のカーボーイ」がいちばん見たいなあと思っているのですが。

緒方美和子